

特殊教育への志向

—理念をもとめて—

足利市立柳原小学校 慶野 礼次

1 はじめに

わたしは精神薄弱教育の道に入って12年になる。12年前の1960年代の特殊教育の風潮と、現代の風潮とでは考え方や内容において、少々異なっていたように思われる。

また、1960年代の日本は「繁栄おう歌」の時代であったともいえる。そして、「より大きいこと」「より多いこと」「より速いこと」は「よいことである」というような価値判断の基準が、知らぬまに一般化していった。政治、経済のみならず、この傾向は教育の世界に大きな影響を与えた。

しかしながら、その繁栄と同時に、いろいろのひずみを生じる結果をもたらすことになった。また、皮肉なことには、はなやかな繁栄とはうらはらに、今や人間の存在、そのものについての危機感が影を投げかけている。

当時、特殊学級の中には「落穂拾い」ということばがあった。これは一般教育が落して行く落穂を拾って、特殊教育をするという、ミレーの落穂拾いにも似たあわれな姿の児童をすくってやろうという、宗教にも似たものだった。当時、わたしはこのような児童にしっかりと教育の場で穂をそろえてやることはできないものだろうか。(子どもにあった教育)いや、穂をそろえてやれなくても、毎日毎日の教育の場で落穂を出さない工夫はできないものかと考えたものだった。しかし、どうにもならない。そのような状態から、どうしても、このような状態にある児童を救ってやらねばという、教育愛にも似た気持ちで、毎日特殊学級を経営したものだ。

この落穂拾いの教育は現在も続いているわけではない。

しかし、現在、特殊教育は“原点に帰ってみなおしたら”“問い直し”したらといわれている。わたしの気持ちの上では、もう原点には帰れそうもない。色々と激動する社会の変化により、特殊教育も変化してきたからである。現在、数多くある問題の中から、二三あげると、

- 1 特殊教育について、一般社会の人たちの理解がうすかった。総論賛成、各論反対の人たちが多い。
- 2 入級指導に親の理解が得られず、在籍児童減少の問題がある。(これは精神薄弱学級が変わり高IQ化していることを物語っている。)
- 3 特殊学級生徒の高校入学の問題。
- 4 統合(integration)とか、正常化?(normalization)の問題。
- 5 なりてのない特殊学級担任教師。

これらの問題は今までなかったわけではないが、今日大きな問題として横たわっている。内容が質的な問題だけに、すまし顔で通ることのできない問題であろうかと思われる。

教育のことを論ずる場合、教育の世界ではどうしても理念論が先に立つが、それが現実と結合して

いるかどうか問題である。わたしが特殊教育の真の理念を考える場合、現実から遊離した理念では児童不在の教育論になり、不毛の論議に終わってしまう恐れがあるので、ここでわたしは、精神薄弱児教育の実践の中から、精神薄弱児教育の理念について所見を述べてみたいと思います。

2 人間には個人差がある

特殊教育は「心身に障害があって“普通教育”ではじゅうぶんに心身の発達を保障することができない子どもに、その能力や特性に応じ、全面的な発達をさせる学習を保障するために、特別な配慮をすることは当然のことであって“普通教育”のうえに、さらに特別な配慮を加えた教育のことを“特殊教育”とよぶ」これは伊藤隆二氏の特殊教育についての見解の要旨である。¹⁾

特殊教育と一般教育とは分離または対置して考えるべきものではなくて、一般教育では実質的に発達の保障を十分にできない障害児に普通教育のうえに十分なサービスをプラスする、子どもを主体として行われる教育でなくてはならない。

人間はすべて平等であるという理念は正しいし、すべての児童が等しく教育を受ける権利があることも正しい。しかし、人間には他の動物と比較してきわめて個人差があることも認識しなければならない。その個人差は他の動物と比較してきわめて大きい。人間生活の営みの中で、そこには当然、障害をもつ人の存在があるからである。ある方面で勝れた才能をもった者がいるということは、反面で劣弱者がいるということである。

そのような現実立って人間の営みとしてユニークな教育を考える場合、そこには障害をもった人々たちに対する教育ということが当然なされなければならない。したがって、そうした教育を否定することは、人間の発達を否定することに他ならない。あやまった平等という理念を主張することによって、人間の個人差という現実をも否定することになる。それ故に、われわれはまず人間には必然的に存在する個人差や障害という現実を明確には握し、真の意味での平等という理想をもって現実に対応した教育を考えていかなければならない。わたしはちまたに聞く“人は本来平等なのであるから特殊教育をなくして一般教育の教育体制の中でやれば”という意見には賛成できない。現実から出発し、人間は元来不平等にできているものであり、これを平等にしていかなければならないのが、われわれの務めであるが、それには、まず不平等にできている人間について教育的対応はどうかあるべきか、ということを中心に考え、しかる後に一般教育と特殊教育との関連を考える立場である。

いま特殊学級を解散して、彼らを普通学級に追い返してやることは、1945年代以前の状態におしもどすことにはかならない。一体、何のための四半世紀であったのか。何のための先輩たちの苦勞であったのか、くやまれてならない。

3 統合教育への道は

近ごろ、障害児の教育の理念として、*integration*(統合)とか*normalization*(正常化?)とか一般学級の交流とかということばを聞くが、そうした考え方自体は望ましいことである。これは特殊教育の理念であるとともに一般教育についても理想である。この理想の実現を通じて、特殊教育と一般教育との溝はやがて埋められていくことになるだろうが、その埋め合わせは両岸からやっ

かねばならない。無理のない可能な範囲で、障害の程度や種別ごとの特殊性も十分考慮に入れて、観念的ではなく、現実的に進める必要がある。その道程こそが統合教育への道であると思う。

でも、全く区別しなくても、みんなと一緒にやっていけるのなら、そこには障害児は存在しない。障害児と正常児とを比べれば、その相違点より共通点の方がはるかに多い。これは彼らが障害児である以前にまず発達しつつある児童であるから、当然至極なことである。ですから正常と異常の間には微少差の不断の連続があって、それを追っただけではどこにも切れ目は存在しない。例えば、仮に知能指数75以下を精神薄弱児とするなど決めても75の児童と76の児童との間には本質的な決定的な差が発見されない。知能の程度の微少差の連続、それ自体の中からは、正常と異常の区別はできない。換言すれば、知能の低さ自体は障害ではなく、それが通常の教育の中におかれた場合にはじめて障害となるのである。ここで障害児教育をしていくのに区別しなければならぬ理由が存在する。精神薄弱児は知能の働きが伸びないために対人関係の発達も遅滞し、それに応じてことばも発達しないというように、もろもろの発達のおくれが見られる。ただ正常児と一緒に生活させればそれだけで伸びていくというものでもあるまい。対人関係の理解の仕方、処理の仕方、仲間との集団生活に入っていくかどうか、その行動範囲が広がっていくかどうか、精神発達が促されていくかどうか、という見方なども、今までの一般学級にない見方をしなければならぬと考える。統合だ、交流だといって、すぐに一般学級に児童をおいやるのははなはだ危険である。一番ひどい目にあるのが障害児ではないか。わたしは統合教育をおしすすめるのは、一般教育の改革運動と思っている。インテグレーションが少しでも可能になるように変わること一般教育がそれだけ本来の教育の姿にかえることだと思う。

遅れの軽い児童を一般学級へ移して教育しただけでは問題が根本的に解決したとは思わない。一般学級が、そのような児童を受け入れられる方向に改善されることが必要である。例えば、教育課程の改善、学級集団や指導グループの人数の削減、指導グループ編成上の工夫、生活的、経験的学習形態の導入、補助教師の配置、教師の個別的配慮への努力、教材教具などの諸条件が満たされることが要請される。まさに行政的措置が要請されるが、学校や教師の努力にまつものも多い。

4 児童の教育的ニードに応じた学級を

このごろの特殊学級にとっての大きな仕事の一つに入級者の勧誘がある。担任教師が親の説得力を入れても、どうしても親は「ウン」という返事が返ってこない。これは開設当初から考えると大変事情が変わってしまったようだ。担任教師の中にはこんなに苦労するのなら、特殊学級などなくなってしまった方がよいのではないか、という意見まで聞かれる。もちろん、日常の教育活動の中で不徹底と説得力の稀弱化もあるだろうが、そればかりではない。また、反対にこの際、特殊学級への入級を義務化にしてしまって、相手がそろそろはいつてくるようにしたほうがよいのではという意見も聞かれる。わたしは両者の意見とも賛成しかねる。そうは言っても親への説得をするのに自信がなくなってくると特殊学級に入級させようと思っても迫力に欠け、相手を納得させる力は起こってこない。“率直に言って、これは我が国の精神薄弱教育の危機に直面していると思う。”入級がスムーズにいき精神薄弱教育が日本の風土に根をはるよい方策はないものだろうか。“この問題を避けて通ることをやめ、正面から対決するときさしかかっていると思う。”²⁾

特殊学級の児童に目を転じて見ると、由来重度な障害の親ほど学級を希望し、軽度な親ほどそれをきらう傾向がある。調査上では特殊学級に入級した方がよい児童が多いのに入級者が少ない。そこでやすきについて入級児を知能の高い境界線児（これは認められている）にまで求める。ですから、在籍児の知能指数は逐年向上する傾向と重度の障害児が入級している。このようになってくると精神薄弱児学級は精神薄弱児学級でなくなり、境界線児や学力不振児、特殊学級児、養護学級児の学級になってしまう。これらの児童は、彼らの教育的ニードに応じた学級が必要である。これらの児童の間にはIQの差で示される量的な差以上に質的な相違がある。特に学業不振児や境界線児などには促進学級（促進＝人間としての成長発達を促進するという意味³⁾）が必要である。このような児童にも、いち早く日なたに出して教育方法の研究がのぞまれる。このことは促進学級を必要とする児童にも必要なことだが、精神薄弱児のためにも必要である。そのためには学級の編成がきわめて流動的に行われることが前提条件となろう。そうすることにより、精神薄弱教育の体質の純化を図り、その実態の上に立ってこそ日本の精薄教育が根をはり推進していけるのではなからうか。

5 教育観の転換を

最近になり高校全入ということが問題になり、特殊学級生徒も高校へということがいわれている。どういところからの発想だろうか。先に述べたように人間には個人差がある。これはなんといっても厳然たる事実である。このことを前提として彼らをどう生かすかということが、教育者に課せられた問題でもあり、社会の責任でもある。全員を入学させ高校の教育課程の中で教育することは実際問題として大きな矛盾を感じる。俗なことばではあるが、ミソもクソも一緒に考えられているなげかわしい時代ではなからうか。

これにどう対処していくか、わたしは明治維新以来醸成されてきた教育観の転換がなされなければ解決のみちは得られないと思う。立身出世主義につながる大学進学とその予備校の高校観といったものが残っているかぎりどうにも問題は解決されない。また、教育はなんでもかんでも学校という観念も打ち破っていかなければならない。学歴でなく、本当の人間教育とは何か、卒業証書でなく実際の腕や心が尊重される社会、そうしたものを育てていくための教育が尊重されるようにならないかぎり根本的解決の道はない。旭出学園長の三木安正氏はこのことについて次のように述べている。

“過去100年間に形成されてきた学校教育観を打破し、新たなる発想のもとに、真の人間教育に向かうという方向転換がなければ問題解決はできないと思う。100年間で形成されてきたものを転換していくためには200年かかると考えねばならぬだろう。⁴⁾” そんなのんびりした考えでは……その通りである。

しかし、教育の本当の改革などというものは、権力や暴力で行うべきものではなく、心を真に教育に寄せる人々の広い納得の上で行われなければならない。

6 おわりに

教育とはひとりひとりその心身の発達を将来一般社会生活へ参加してゆけるような方向に一步でも半歩でも伸ばしていく仕事、彼らの発達の可能性をそういう方向に実現することを援助する仕事には

かならない。これが教育の本質であると思うし、教育の基本理念であると思う。一般教育もこれを軸にまわってほしいものである。

諸先生方の御指導をいただければ幸いです。

- 1) 伊藤隆二編 心身障害児教育の原理 P 1 2 ~ 1 3 福村出版
- 2) 辻村泰男著 転形期の特殊教育 P 2 0 1 日文選書
- 3) 竹林和良著 ちえの遅れた子どもの教育 P 3 1 三一書房
- 4) 雑誌「精薄研究」 2 0 9 号 P 7 日本文化科学社